

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：15201

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2016

課題番号：25560130

研究課題名(和文)北尾次郎ルネサンスプロジェクト

研究課題名(英文)Diro Kitao Renaissance Project

研究代表者

西脇 宏(NISHIWAKI, Hiroshi)

島根大学・外国語教育センター・教授

研究者番号：00144684

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本プロジェクトでは、北尾次郎を我が国における数理気象学の先達と評価し、科学史に初めて正当に位置付けた。江戸東京たてもの園でテ・ラランデ邸として公開されている建物が、北尾次郎邸であることを、内装面から再度証明した。北尾次郎が、森鷗外『舞姫』の主人公太田豊太郎のモデルの一人である可能性を初めて提起した。『普国憲法起原史』の歴史的意義について考究した。北尾次郎の独文小説手稿"Waldnympe"II-3巻の翻刻が完了した。

研究成果の概要(英文)：In our project, we evaluated Diro Kitao as one of the greatest predecessor of mathematical meteorology in Japan and placed him justly in scientific history for the first time. We also demonstrated again that the building that is shown to the public as De Larande House at Edo-Tokyo Open Air Architectural Museum is actually Diro Kitao Residence, considering the interior design of the residence. Furthermore, we pointed out the possibility that Diro Kitao is one of the candidate models of Toyotaro Ota, the main character of "Maihime" written by Ogai Mori. A study of the historical significance of the "Origin and History of the Prussian Constitution" was done as well. Finally, the firstprint of Diro Kitao's manuscripts of his German novel "Waldnympe"II-3 was completed.

研究分野：ドイツ語教育, ドイツ語圏文化論, 日独交流史

キーワード：北尾次郎 科学史 数理物理学史 建築学史 法学史 ジャポニズム 日独交流史 日本人によるドイツ語文学

1. 研究開始当初の背景

(1) 三宅雪嶺は、北尾次郎について『偉人の跡』(一九一〇)で、明治第一の天才と評していた。

「北尾氏は確かに天才の名に値ひす、明治年間に學者は多きも天才を求むれば先ず氏を推さざるを得ず、境遇にて善かりしならば、必ず世界の理學者として顕はれたるべし。不幸にして天才は往々不具者なり。氏は理學上の推理及び文學上の趣味に於て、驚くべき頭脳を有せしも、俗事に於て殆ど兒童と擇ぶ所無く、爲に最も適処たるべき理科大学(現在の東大理学部)より、農科大学(東大農学部)に貶せられぬ、而して、猶ほ相当の働きありしより推せば、如何に能力の秀でしかを察するに足る。氏は天才の人として認められしも、その天才を抑へし學界の情實弊惡は一層多く認められしに似たり。これは将来何事かに就き例證として引かれん。」

研究代表者はかつて、»Waldnymphe«の翻刻を中心とした基礎研究に従事していた。次郎は全くの個人的趣味として、5500ページを超える未発表の独文小説»Waldnymphe«を営々と執筆し、さらには、大部分が手彩色された1000点以上の挿絵を自ら描いて、それに添えていたのである。これらの手稿は、物理学や数学の講義ノートと思しき稿本や手帳類とともに、同名の孫、北尾次郎氏により寄贈されて現在は島根県立図書館の所蔵するところとなっている。

公人としての北尾次郎はあくまで自然科学者であったのであり、気象学を始め、色覚を光学的に測定する機器 Leukoskop や農学関係の発明など、極めて広範な業績を残している。さらには、口述出版ではあるが、『普国憲法起源史』なる法学史にかかわる著作も存在する。

このように、北尾次郎の業績は、人文、社会、自然科学の全領域にわたるものであるが、この「一事を仕出かすべき英俊」には、「そのことに必須の智識を心得置く途なきがゆえに」(南方熊楠『平家蟹の話』)、今となつてはその業績を知る者がほとんどいないのが研究開始当初の現状であった。

(2) 小金井市にある江戸東京たてもの園で、現在デ・ラランデ邸として公開中の建物の設計者は、実は北尾次郎であった。

次郎が自邸を自ら設計したことは、かつての教え子であり、同僚であった稲垣乙丙が、一九〇七年に科学雑誌『科學世界』に掲載されていた北尾次郎への追悼文の中ですでに明確に述べていた。

世紀を越えてその建物が残っていた奇蹟に驚きを禁じ得ないが、設計者に関する誤謬はぜひとも正す必要があった。

2. 研究の目的

島根県松江市生まれの北尾次郎は、我が国大学創成期の万能の天才であった。この北尾次郎の、人文、社会、自然、3科学全領域に及ぶ業績を、研究協力者とともに気象学、数学、医学史、農学史、法学史、建築史分野などにおいて検討、再評価を行い、もって「北尾次郎ルネサンス」を始動させることが本プロジェクト当初の研究目的であった。

3. 研究の方法

(1) 北尾次郎の全人的再評価を目指す学際的総合研究プロジェクト方式で、研究を進めた。

(2) 主にドイツで埋もれたままとなっていた北尾次郎関連の一次資料を多数発掘し、この新資料に基づいた実証研究を推進した。

(3) アカデミズムにのみ蟠踞せず、常にアウトリーチ活動を意識して研究活動を行った。

4. 研究成果

(1) 北尾次郎直系の孫であった北尾次郎氏が北尾次郎に関して書き残した文書を紹介し、ドイツ語に翻訳した。

»Waldnymphe«II-3 卷に含まれる物語中物語である「伯爵夫人のメルヒェン」を、翻刻し、ドイツ語を解さない読者にも届くことを意識して、日本語訳して紹介した。

(2) 北尾次郎の気象学における業績に焦点を合わせ、「理科大学紀要」に三部作として発表された地球大気の運動に関する力学理論 (Kitao, 1887) が後世の気象学研究に及ぼした影響を、主として東京大学における後継者群の人脈を通して概観した。

論文内容そのものの解説・解説が目的ではなく、気象学のなかの別分野である大気放射学や雲物理学等の歴史には一切触れなかった。記述に当たっては、科学史としての事実記載・文献表示は勿論であるが、上記論文から約130年が経過した現在のわが国気象界における伝統継承の実態を学問的見地から評価することを試みた。

数理物理学者としての北尾次郎の業績が、日本における理論気象学の先駆者として、純粋に学問的見地から初めて正当に科学史に位置付けられ、評価された。

(3) 北尾次郎のドイツにおけるオーナメント下絵書きのアルバイト活動が明らかとなり、江戸東京たてもの園でデ・ラランデ邸として再建された建物が、北尾次郎が自ら設計した自邸であることが内装面からも改めて証明された。

北尾次郎邸と称すべきこの建物の名称は、相変わらず訂正されていないが、真実はここに再度明らかとなった。在野の研究者の厳密に

学術的論拠に基づく主張と、斯界を代表する研究者の商業主義にまみれた権威主義が好対照のこの論争は、我が国アカデミズムの集団的無責任体制をはしなくも白日の下にさらした。

(4) 北尾次郎の生年に関して、北尾家保存の家系図、およびドイツの大学で保管されていた一次資料により、従来の桑原説より生年がさらに1、2年後の1855年、ないしは1856年であることが確実となった。

(5) 明治6(1873)年文部省官費給与の制度廃止後もドイツにとどまった北尾次郎が、新聞、雑誌への寄稿等で糊口をしのいだことは、従来より知られていたが、その活動の具体的内実については、今まで一切不明のままであったが、北尾次郎のドイツでの雑誌寄稿の一端が明らかとなった。

1877年6月、7月、9月の3回に分けて、Westermann's Jahrbuch der Illustrierten Deutschen Monatshefte. Ein Familienbuch für das gesammte geistige Leben der Gegenwart. に掲載された「日本の神々」(„Die Götter Japans“)がそれである。

この雑誌の編集者により北尾次郎が「言語および古代文明研究者」(Sprach- und Alterthumsforscher[sic])と紹介されていた意外な事実も初めて明らかとなり、絢爛たる万能の天才北尾次郎に、また一つきらびやかな称号が加わった。

(6) 北尾次郎が、鷗外『舞姫』主人公のモデルである可能性について提起を行った。検証を行ったのは、以下の諸点である。

①北尾次郎と森鷗外が共にドイツ語だけで書かれた文藝雑誌“Von Westnach Ost”(日本語タイトル『東漸雑誌』)の編集をしていた時期が存在し、それがちょうど『舞姫』執筆時期と重なることから、森鷗外が北尾次郎を主人公「太田豊太郎」のモデルの一人として参考にしていた可能性があり、従来「太田豊太郎」のモデルとされてきた他の人物の経歴などと比較した。

②鷗外研究者・長谷川泉が書き残していた、一八九〇年一月に『国民之友』で発表された初版より以前に、帰国の際のフランス船Ava号船中で認めた「垂瓦船中稿」が存在するのではないかと、の仮説を検証した。

③ベルリンで出版されていた月刊雑誌『東亜Ost-Asien』に一九〇八年から連載された、ドイツ語版『舞姫』(宇佐美濃守訳)こそが、実は翻訳ではなく、鷗外が『国民之友』発表に先立ち、ドイツ語で執筆し、関係者だけに配布した私家版ではなかったか、との可能性の根拠を示した。

④『舞姫』を鷗外が執筆した理由について、当時の北尾次郎一家周辺との関係の中から考察した。

⑤北尾次郎の絵画作品を含め、北尾次郎が森

鷗外に与えた影響を考察した。北尾次郎を通して、別の『舞姫』解釈の可能性が浮上した。

(7) 北尾次郎述著『普國憲法起原史』成立におけるイエーリング、シュタインらと北尾次郎の接点が明らかとなり、法学者としての北尾次郎が初めて紹介された。

(8) 『舞姫』主人公太田豊太郎北尾次郎モデル説に、法学者としての北尾次郎を重ねることで補強がなされた。

(9) »Waldnymph«II-3巻、第2、第3章の翻刻が行われ、II-3巻全巻の翻刻が完了した。

(10) ジャポニズム作家として北尾次郎に注目し、北尾次郎をドイツにおけるジャポニズム作品の先駆者とする位置づけを行った。ドイツの読者にも広く届くようドイツ語による要約も添付した。北尾次郎挿絵作品集を上梓し、北尾次郎独自のジャポニズムを一般読者も視覚的に捉えられるよう配慮した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

① 西脇 宏、北尾次郎研究補遺、島根大学外国語教育センタージャーナル、10、2015. 3、143-158.

[図書] (計3件)

① 西脇 宏 他、北尾次郎ルネサンスプロジェクト研究報告書、北尾次郎ルネサンスプロジェクト、2、2017. 2、80.

② 西脇 宏 他、北尾次郎とジャポニズム、北尾次郎ルネサンスプロジェクト研究報告書、北尾次郎ルネサンスプロジェクト、別冊、2017. 2、72.

③ 西脇 宏 他、北尾次郎ルネサンスプロジェクト研究報告書、北尾次郎ルネサンスプロジェクト、2016. 2、232.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西脇 宏 (NISHIWAKI, Hiroshi)
島根大学・外国語教育センター・教授
研究者番号：00144684

(2) 研究分担者

なし。

(3) 連携研究者

なし。

(4) 研究協力者

廣田 勇 (HIROTA, Isamu)

広瀬 毅彦 (HIROSE, Takehiko)

西本 将樹 (NISHIMOTO, Masaki)

上野 敬子 (UENO, Keiko)